

向陽介護便り

アリとキリギリス (セミ?) 物語

新年早々の新聞のコラム(元検事総長が書かれた)に次のようなものがありました。

「木枯らしが吹くと舞い戻ってくる人々がいる。『検事さん、私も歳でね。できたら南の方の刑務所をお願いしますよ』 目の前でにこにこしていた老人の前科は15犯ぐらいであった。ここ7,8年は無銭飲食ばかりで、冬捕まっては夏過ぎに出てくるスケジュールを繰り返していた。飲み屋で、焼き鳥と焼酎と丼ものを食べて『すみません、お金がありません。警察をお願いします』という事件ばかりで、店主も仕方なしに警察を呼ぶが、嚴重処分を望んでいるわけでもない。窃盗の場合には、繰り返してやれば重罰化されることもあるが、無銭飲食にはそれもない。冬の間、寒さを凌げ食事も保証される刑務所に入るのが望みなので、起訴猶予や執行猶予もつかず、被害額2000円余りでの量刑は半年から10ヶ月の実刑がせいぜい・・・(略)」

このコラムを読んで頭に浮かんだのが、イソップ物語の中の『アリとキリギリス』の話です。私が知っているお話の内容は、夏の間、蟻は一生懸命働いて冬の食料を蓄え、一方キリギリスはバイオリンを弾き歌ばかり歌って夏を過ごす。冬になりキリギリスは食料を探すが見つからず、腹をすかせ、蟻のところに食べ物をお願いに行きます。すると蟻さんたちは「さあ、遠慮なく食べてください。」と食料を分けてくれました。日本版「アリとキリギリス」はめでた、めでたしで終わりますが、ヨーロッパやアメリカでは、この寓話の結末が違うそうです。



そもそも、ギリシアでこの寓話が生まれた時には、キリギリスではなく蝉でした。ギリシアからアルプス以北に話が伝えられていく中で蝉からキリギリスに変わったと言われています。(蝉がない為)そして結末部分は、食べ物を分けてもらおうとしたキリギリス(蝉)に対し、アリは「夏には歌っていたんだから、冬には踊ったらどうだい?」と食べ物を分けることを拒否し、キリギリス(蝉)は飢え死んでしまう、というものです。

1593年(秀吉が朝鮮出兵を行った翌年)、九州の天草でローマ字で綴られた「伊曾保物語」が外国人宣教師の日本語訓練用として印刷刊行され、この寓話が巻頭を飾っています。この本でも、「蟻。げにげにその分ちや。夏秋歌い遊ばれたごとく、今も秘曲を尽くされてよかろうずとて、散々にあざけり、少しの食を取らせて戻いた」と結ばれています。推測ですが、ポルトガル宣教師は原本どおり、「散々にあざけたり」で終わらせようとしたところ、日本人信者が「少しの食を取らせ戻いた」を無理に付け加えさせたのではないかと思います。西洋社会では、「自助の努力を怠るな」という事を強調する話として理解されているのに対し、集団の和を大事にし、相互扶助、博愛の心を教えるために改変された日本版「アリとキリギリス」。アメリカではアリに断られ進退窮まったキリギリスが一念発起して大金持ちになるという物語もあるそうです。(アメリカンドリーム)

キリギリスが冬の季節も心豊に生きるためには、社会保障制度が整備されていけばとも考えられますが、これからの日本は、どんどん「自助努力」が要求されるようになっていくのでは・・・